

## 言

## 義

土木學會誌 第十四卷第六號 昭和三年十二月

## 鐵道防雪施設に就て

(第十四卷第三號所載)

會員 工學士 小宮 甲 四 郎

會誌第十四卷第三號に於て鷺谷瀧雄君の有益なる本研究は鐵道防雪に關する一般概念を説かれたるものにして著者の勞を多とする所にして同時に鐵道當局が如何に防雪に就ては苦心しつゝあるかを想像せしむるに力あるものと信ず。而して著者は防雪の手段としては防雪林の設置によりて終結を告ぐるものと論結せるものなるも防雪林の設置につきて尙詳細に亙りて之が防雪に對する價值等を論ぜんとすれば勢多少の疑義なき能はざるものあり故に以下二、三の點につきて述べんとす。

一 林幅につきて 著者は吹雪防止林に於ける林幅は冬期常風が直角の場合の有効幅員を20間とし更新上、2倍又は3倍とするを理想とし同時に此の林幅は20間を以て最小限度なりとして立論せられ居らるゝ様なるも實際は然らざる様に思はる。

何となれば各地方に於て夫々特異の狀況例へば風速とか、地勢とか、降雪狀況とか、溫度或は濕度とかにより皆各々異なりたる状態に置かれ居るが故に夫々區間によりて林幅の厚さを異にするを理想的なりとするも此の眞に必要な林幅は上記の如く種々の原因の爲に一寸分らぬから先づ大體20間位でよからうと云ふ實驗的の距離から來て居るものと思はるゝが何等か相當の數字を基としたる理由はなきものにや。

例へば防雪柵の如きものにありては種々なる假定の下に高さを算出する大體標準はありとす故に何等か此れに類するものはなきや、此の點著者の意見を伺ひたし。

二 支持力につきて 著者は積雪防止林の一齊林は絶對的に之を避けて異種の混淆林とせねば積雪を支持する力が弱いとされて居ると説かるゝも實際上の問題に徴するに一齊林が通常の場合に積雪防止の効果を擧げて居るのは認めらるゝ所なるも混淆林との力の比較に當つては多少の疑なき能はずの此の點につきて著者の一考を類はしたし。